

Rudolf Endres

フランケンの新バイエルン国への併合

人々に愛されていた辺境伯カール・アレクサンダーがプロイセン王への王位継承を辞退したあと、1792年1月28日、副総督全権をもって治めていた大臣カール・アウグスト・ハルデンベルク男爵が、ツォレルン家のアンスバッハとバイロイトの両方を手に入れた¹、フランケンとその領邦等族の将来は閉ざされたように思われた。というのは、ハルデンベルクはフランケンを彼の南ドイツにおける遠大な計画の基礎と考えていることを隠さなかったからで、彼はこれによってプロイセンの政策の長い伝統と権力追求を同時に果たそうとしていた²。有効な帝国の法律や領邦等族の特権に目も呉れず、この「啓蒙的専制君主」³ハルデンベルクはフランケンで閉じた小国家を作るために「古典的な領土の分割に直ちに取りかかった。プロイセンがバーゼル単独講和によって対フランス連合から脱退したとき⁴、ハルデンベルクはフランケンで彼の政策を実現できると思った。武力と近隣強国との補償契約とによって、彼はプロイセンによる取得を正当化し、軍事的占領により取得と「返還請求」を拡大した⁵。彼は貴族国家フランケンにおける帝国騎士階級を「国家の中の国家」と断じ、服従させようとした⁶。帝国都市ヴァイセンブルクとヴィンツハイムが暫定的にプロイセンの保護国となっただけでなく、古都ニュルンベルクですら、ハルデンベルクがその囲壁の前まで軍を進めたので、服従することを覚悟した⁷。

またハルデンベルクは食欲にも近隣の教会領ヴェルツブルクとバンベルクの世俗化というフランスの考え方を採用した。彼の想定によれば、予想されたライン左岸の損失のあと、両選帝侯領はまずオランダ総督で子供のいない義兄の国王フリードリヒ・ヴィルヘルムII世の手に入り、彼の死後当然のことながらプロイセンに移譲され⁸、またこれによって南ドイツにおける彼の立場を決定的に強くすることできるはずであった。

しかしこの計画は最終的にフランケンを巡って強力な競争手を呼び込むことになった。その相手とは選帝侯領バイエルンであり、バイエルンはフランケンを巡る争いに加わって結局勝利者となった。選帝侯領バイエルンは18世紀の半ば以来、上プファルツからフランケンへの圧力を掛け、特に政治的にも経済的にも硬直化して弱っているニュルンベルクに対して圧力を強めた。選帝侯カール・テオドアは最終的に閉じた国家の原理を宣言し、プファルツ-バイエルンの領地内にあるニュルンベルクに所属する飛び地をすべて併合した。さらに彼は100年来帝室裁判所で争われていたフランケンの主権問題を巡る争いを改めて取り上げ、1505年のケルンの和約以後にこの帝国都市と締結されたすべての契約を無効と宣言し、1790年にランツフート継承戦争の際にニュルンベルクに取られたヴィッテルスバッハ家の管轄区域を取り返した。無力なこの帝国都市はバイエルンのこの無法な遣り方と占領に対して、皇帝と帝国に抗議することしかできなかったが、なんの効き目もなかった⁹。

次の10年間新しいバイエルンの創成者であるモンジュラはますますハルデンベルクとそのフランケン政策に対して公然と敵対した¹⁰。ミュンヘン政府はハルデンベルクの特に帝国騎士階級と帝国都市に対する暴力的な返還請求に異論を唱えなかった。というのはまさにバイエルンも同様に *Territorium clausum*（閉鎖領邦）の法的立場を裏切っているからであった。しかしバイエルンはヴェルツブルクとバンベルクを得ようと努めるハルデンベルクを巧みに妨害した。ラシュタットの会議でバイエルンはフランケンの領地整理と拡張を公けにしたが、それについてフランスの支持を得た。というのは、ナポレオンはバイエルンがオーストリアに対する強力な防壁として、また南ドイツにおけるフランスの影響力の保証人であると考えていたからで、フランケンにおけるハルデンベルクの「新プロイセン」を拒否した。そういうことでフランスは補償計画を提示した。それは、バイエルンはシュヴァーベンにある司教領のほかにバンベルクとヴェルツブルクを獲得し、それに対してプロイセンにはベルクを得るというものであった。プリンツ・フォン・オラニエンはアンスバッハとバイロイトおよびニュルンベルクの都市部が自立したフランケンの公爵領となることで妥協するしかなかった。

しかしこれでモンジュラは満足せず、まもなく彼の政策に次の有力な協力者を見つけた。それはフランスのようにドイツの中位国を強くするという目標を追求しているロシアであった¹¹。従ってロシアとフランスは、プロイセンに南ドイツで支配的な役割をもたらしかねない、

ヴェルツブルクとバンベルクを獲得するというハルデンベルクの計画をはっきりと拒否した。これでプロイセンのフランケンにおける権力政策は破綻した。アンスバッハとバイロイトをプロイセンが獲得したことは遠い外堡でしかなかった。ハルデンベルクは北ドイツでプロイセンの拡張を行っていたハウクヴィッツによりベルリンに呼び寄せられた¹²。こうしてバイエルンを南ドイツの強国にする、特にフランケンの管轄区域を獲得したいというモンジュラと彼の政策の場が開けた。ラシュタットとリュネヴィルの和約でヴェルツブルクとバンベルクに対する保証を得たあと、モンジュラはさらにフランケンにおけるバイエルンの獲得を完成させるべく、アンスバッハとバイロイトも獲得を目指した。モンジュラは今や欧州の強国の支援のもとにハルデンベルクのフランケン政策の後継者となった。

長く粘り強い交渉、そこでは法的な立場や当該の人物が重要な役割を果たすのではなく、冷静に収入や価値それに人間が相互に評価され、高値で売りつけられたのだが、の結果、1802年の夏、帝国代表者主要決議の前に、フランケンについて最終的に次のような合意に到達した¹³。それはプロイセンは拡大も領地拡張もしないというもので、これでハルデンベルクの「フランケンの新プロイセン」政策は最終的に破綻した。選帝侯領バイエルンはアンスバッハの飛び地の、あるいは境界を接している帝国都市ヴィンツハイム、ヴァイセンブルクおよびローテンブルクとアイヒシュテットの「Oberstift」の譲渡を獲得し、さらになによりも司教区本部のヴェルツブルクとバンベルクを得た。選帝侯マックス・ヨーゼフは「フランケンの公爵」の肩書きを付け加えることができた^{13a}。ただし司教領アイヒシュテット本体、「Unterstift」はヴィッテルスバッハ家が望んだようには得られず、皇帝の弟トスカナ大公フェルディナントにオーストリアの次子相続財産としての主権がある所有物として譲渡された¹⁴。これによって上プファルツと侯爵領ニュルンベルクとの間にしっかりとした楔が打ち込まれたので、これを取り除くことがバイエルンの政策の重要な課題となった。

フランケンおよびそれに伴って、また将来のバイエルン王国の拡張に対して、ヤクスト川、タウバー川およびマイン川下流沿いに選帝侯領ライニンゲンと選帝侯領クラウトハイムとが作られたこと¹⁵、さらにダルベルクの国をマインツとヴェルツブルクの管轄区域からアシャッフエンブルクの周りに作られたことがさらに重大事であった¹⁶。バイエルン軍による軍事的占拠が、世俗化および皇帝直属の地位剥奪に委ねられた地域においてすでに1802年夏に行われ、11月29日に市民占有となった。つまり1803年2月25日の代表者会議主要決議の公表よりも前に行われた¹⁷。自立を獲得したのはドイツ騎士団長および大団長であり帝国直属騎士階級であるニュルンベルクだけであったが、しれによってさらなる自立が保証された訳でなく、それはニュルンベルクもはっきり分かっていた。というのは、バイエルンがしばしばさらなる領地整理と統一を迫っており、特に「新しいバイエルンの地方」を本土に結合することをずっと要求していた。そういうことで1802年のプロイセンとの「本土-国境-および純正化補償」における追加合意ではニュルンベルクの領地の割譲を視野に入れていた。ニュルンベルクの抗議は役に立たないままであり、それに対してバイエルンにより「フランケンにおけるプファルツ-バイエルンの騎士団」と宣言され、武力威嚇されている騎士団は、経済的弾圧によりいやいやではあったが、1804年1月30日皇帝および帝国の音楽学校を獲得し、それに基づいて騎士の自由と自立を再び作り出すことに結果として成功した¹⁹。その上、直ぐにフランケンの最後の自由な領地を巡る争いはオーストリアとバイエルンとの間の戦争の危険を招来した。

しかし帝国直属騎士団はそう長くは自分達の自由に喜んでいられなくなった。1805年12月19日司令官ベルティエの軍令により、武力をもってナポレオンの領地整理のもとに置かれ、バイエルンに帰属した²⁰。フランケンの自由な貴族の没落はこれをもって決定的となった。プレスブルクの和約（1805年12月26日）²¹によってトスカナの選帝侯領アイヒシュテットがバイエルンに、一方でフランケンにオーストリアの拠点ができることにモンジュラが反対したにもかかわらず、ハプスブルクのフェルディナントに選帝侯領ヴェルツブルクが大公領として割譲された。

そうはいつでもバイエルンは、かつての帝国都市シュヴァインフルトとローテンブルク、並びに帝国領の村ゼンフェルトとゴックスハイムを獲得し、さらに世俗化した修道院エブラッハの財産、ドイツ騎士団の騎士修道会管区、および特に帝国騎士団の所有物が得られること

になるならば、1802年に所有状態であった選帝侯領を明け渡す用意があった。これによって多くの飛び地を抱えたまま新しいハプスブルクの大公領ヴェルツブルクが誕生した²²。国王と国務大臣モンジュラのフランケンにおける優先事項はプロイセン領のアンスバッハとバイロイトを獲得することであった。1805年秋ベルナドットによる中立侵犯のあとバイエルンはフランケンを巡るプロイセンとの戦争に備えたが、ナポレオンのアウステルリッツの勝利が状況を変えた。ハウクヴィッツは早々とアンスバッハを諦め、ナポレオンのシェーンブルクの協約でベルクとの交換を条件にバイエルンに渡すことが決められた。ハルデンベルクの激しい抵抗とナポレオンの強烈な軍事的脅迫のあとようやく1806年2月15日最終的に選帝侯領アンスバッハはバイエルン王国に割譲された²³。この所有はアンスバッハに憧れていた司令官ベルナドットとハルデンベルクの「フランケン派」の有能な人物であるプロイセンの公使館参事官ナグラーとの共同作業により夏まで引き延ばされた²⁴。「内外の安定を固める」ためと称して新しい宗主国により大した感激なしに締結されたライン連邦²⁵は、フランツII世が帝国皇帝の冠を脱ぐよりも前に神聖ローマ帝国ドイツの解体を意味した。16のライン連邦加盟国はナポレオンの庇護の下にあり、まだ残っている帝国領邦を自分達に分配した。こうしてバイエルン王国はフランケンで財政的に疲弊した帝国都市ニュルンベルクと、選帝侯領エッティンゲンとシュヴァルツェンベルク、伯爵領カステル、領地ヴィーゼンハイトとシュペックフェルト、およびドイツ騎士団の騎士団領のいくつかに対する主権を獲得した。ホーエンローエ家の領地からはキルヒベルクとシリングフルストの上位管轄区域だけがバイエルンの手に落ちた。これでもっとフランケンにおける帝国領邦および新しく作られたライニンゲンとクラウトハイムはバイエルンの一部として帝国直属を剥奪され、吸収された。

旧帝国の終焉とともに1500年から存続したフランケンの帝国領は終わりを迎えた²⁶。1世紀にわたるフランケンの権力の均衡は1790年プロイセンの介入によって著しく損なわれた。ハルデンベルクは直ちに国王に対して管区の監理局を要請したが、取り上げられなかった。彼の手強い相手はツヴァンツィガーであった²⁷。彼は多数のもっと小さな管区等族の公使で、さらに「旧フランケンが新フランケン」に入ったときはフランスの庇護のもとに自立した「共和国フランケン」が作られるのではないかと疑っていた。しかしながら軍の侵攻はフランケンのジャコバン主義者の野心を手早く一掃した。

ラシュタット会議でフランケン管区はオーストリアの助けを借りてもう一度救われることに成功した。ハルデンベルクは1801年のあと、帝国代表者会議によりこれから行われる変更に影響を与えることができるように再びアンスバッハ - バイロイトの管区公使の役職を得ていた。これに対して管区監理局の役職はバンベルクの占有以降バイエルンが要求し、行使した²⁸。1806年8月6日皇帝が冠を脱いだことによって旧帝国と共に管区の憲法もまた終わりを告げた。しかしフランケンでは文字通りの解体が行われた。まずプロイセンはアンスバッハがバイエルンに移行したあともアンスバッハの返還請求権を留保するよう主張したが、モンジュラはこれをきっぱりと拒絶した。モンジュラは6月初めタウフェウスを新しい公使としてフランケン管区に送り、彼に監理局の業務を行わせた。8月3日タウフェウスはモンジュラに管区議会の解消を要請し、モンジュラはこれを許可した。しかしこの管理権限にプロイセンが異論を唱えたためタウフェウスはしばらくこれを延期した。8月15日ヒューゲル男爵が皇帝およびヴェルツブルク管区公使として公式に管区議会に皇帝の退位を通知し、これをもって彼の管区における活動は終わったと述べた。これに応じてタウフェウスは翌日国王陛下の名において管区議会の解散とすべての管区業務の終了を宣言した。彼はまたバイエルンの為に管区の金庫と文書庫を保管した。バイエルンの措置に対して小さな管区等族は了承しなかった。彼らはプロイセン政府にその指導のもとで引き続き議会を開けるように、ニュルンベルクに公使を送るよう要請した。プロイセンはこの時代錯誤の提案を拒否したが、バイエルンの措置に抗議することは怠らなかった。

バイエルンには、ハプスブルクの大公領ヴェルツブルクと並んで、いまだにバイロイトが獲得できないままであった。バイロイトは1806年秋にフランス軍が占領し、ティルジットの和約(1807年7月9日)によってナポレオンに割譲されることになっていた。ナポレオンはこのツォレルン家の選帝侯領を軍隊の兵站基地として収奪し、これがフランス占領時期にバイロイトにとって7百万グルデンを超える負担となり、将来の領土移譲の際に補償要求として

留保されていた。エアフルトで行われた選帝候会議でナポレオンはバイエルン国王に 2500 万フランをバイロイトに支払うことを要求し、バイエルンはしばらく渋ったあと 1810 年 2 月 28 日のパリ条約で 1500 万フランを払って選帝候領バイロイトを最終的に獲得した²⁹。

これでもってバイエルンによるフランケン的重要部分の獲得が完了し、バイエルンは実際に中位国となった。その後の何年かで近隣諸国に対する小さな補償がいくつか行われた³⁰。

こうしてクライルスハイム近辺の旧アンスバッハの領地、ホーエンローエ家のキルヒベルクおよびローテンブルクの多数の地区がヴェルテンベルクに帰属した。これに対してリートの協約における政治的転換およびナポレオンに対する勝利により、バイエルンはさらにフランケンで領地、特に大公領ヴェルツブルクおよび侯爵領アシャッフエンブルクを獲得した。

一方、バイエルンが力を注いだラインプファルツへの陸橋は実現しなかった。バイエルンは単に「上ライン地区」ならびにフランケンでレドヴィッツ管轄区域およびかつてのフルダの管轄区域ハンメルブルクとブリュッケナウおよびヘッセンの管轄区域アルツェナウ、アモルバッハ、ミッテンベルクおよびクラインホイバッハを得ただけであった(1816 年 4 月 14 日)。

1818 年のアーヘン会議でもって、領地の再配分、徹底的な「領地整理」および容赦ない「値切り行為」の時代は終わった。プロイセンはフランケンから駆逐され、新しい王国バイエルンが勝者となり、アシャッフエンブルクを含むフランケンの帝国領の向こう側に旧管区の境界まで拡大したが、一方ではメルгентハイム周りとホーエンローエの旧フランケン領はヴェルテンベルクに持って行かれ、また北では選帝権のある伯爵領ヘンネベルクはヴェッティン家の相続人のものとなった。

領土の変更、軍事的占領および獲得はフランケンにおける新たな形成と分割の最初の一步に過ぎなかった。これと同じくらい重要なのは新たに獲得した異質の領地、世俗的および宗教的小国および矮小な国の塊を集積して本土に結合するという課題であった。これは、新しい、同じ形の国家機構によってのみ可能であった。啓蒙的専制主義の考えに従ってモンジュラは「バイエルン帝国」の形成を完成したが、それは「行政的統合」と同時に「上からの革命」によって、古い封建的な権力や古い等族としての特典と特権を持っている教会および貴族の排除あるいは解散によって行われた。国家の統一と、すべての地方および市民の平等とがモンジュラの国家形成の基本理念であった³¹。

選帝候領バイエルンはまずフランケンの一般国土委員会と、国土管理局と宮廷裁判所とをバンベルクとヴェルツブルクに地方の最高行政機関として設置した。その後、他のすべての新獲得領で行ったように、両地方に旧バイエルンの司法を担当する裁判所と行政のシステムを導入し、また財政に対して財政担当の役所を置いた。地主や司法上の、またその他の慣習による権利と関係を考慮することなく、地積に応じて透明に決定された課税行政区を形成し、さらに教育区および教会の教区に適合させた。それから旧 **Realgemeinde** は自治管理権を剥奪され、できるだけ均一な政治的共同体に新たにまとめられた³²。

1808 年 5 月 1 日の憲法³³とそれに続く「組織の勅令」によってモンジュラは個々の国土部分の画一化と融合を強引に進め、決着をつけようとした。

モンジュラは彼の厳格な国家主義と冷静な合理主義でもってその最高点に到達したが、やややり過ぎた。1808 年 6 月 21 日の最高指令は全王国を「容赦なくこれまで存続した地方の区域を自然境界を考慮しながら出来るだけ均等な管区に分割した」。フランケンには旧ミュール管区(アイヒシュテット)、マイン管区(バンベルク)、ペグニッツ管区(ニュルンベルク)およびレッツァト管区(アンスバッハ)に分けられた。

これでもって古い地方システムは排除された。管区の一般国土委員会とそれと同等に配置された財政担当の役所は、ミュンヘンの省が特別大きな権限と資格を与えなかったにしても、本当の中級官庁であった。ミュンヘンの中央集権はいたるところに存在した。

1810 年ごろモンジュラ時代の無条件統一と中央集権はその頂点を越えた。特にフランケンの等族や世襲の権利を回復した登録された貴族に再び大きな権利と権限資格が認められた³⁵。また地方や自治体に再びより多くの自由裁量と自己責任の権利が与えられた。

モンジュラの失脚は結局自由で同時に復古的な国家秩序への道を開いた。1817 年 2 月 20 日新たな改革によって管区の割り振りが国の新しい地域の状況に適合された³⁶。地方裁判所および貴族裁判所(**Herrschaftrichter**)をいろいろと動かした後、それによってフランケンにレッツァト管区(アンスバッハ)、上マイン管区(バイロイト)および下マイン管区(ヴェル

ツブルク) が設立され、これが後の地方の3分割につながった。1817年国王の義理の息子ウジェーヌ・ボアルネにロイヒテンベルク公爵として、また「最初のバイエルン帝国の等族貴族」として、譲渡された選帝侯領アイヒシュテットはレーゲン管区に振り分けられた³⁷。ハルデンベルクがかつて乱暴にも分割したプロイセンの田舎はもちろん、司法と行政のために地方裁判所と財政管理の役所を持つ低地は手を着けられることはなかった。行政的に統合しただけでは「新しいバイエルン」から「バイエルン国民の心情」を持つ、得心したバイエルン市民は生まれなかった。フランケンからバイエルンにならせるには、また統一された国家意識を持つ統一された国民に成長させるには、注意深くまた一歩ずつ新しい国民の層、特に地位の意識が強いフランケンの貴族を、以前からそうでありまた特に宗教的な影響を受けた文化的な独自の生活を考慮し、また維持しながら、社会的にも経済的にも組み込むことが必要であった³⁸。摩擦のない支配者の交替にもかかわらず、フランケンにおいて当初の抵抗と反バイエルンの感情は見過ごすことはできなかった。そういうことでヴェルツブルクでもバンベルクでも、バイエルンによる占有が決まったとき氷のように冷たい拒絶が広がった³⁹。

確かに、オーバーテュアが彼の文書「フランケンにおけるバイエルンとバイエルンにおけるフランケン」で述べたように、平和的な同化を推し進める声が散発的に存在した。特に市民層の啓蒙主義者はバイエルンの支配によって修道院制度や膨張した宗教者による行政が終わることを期待した⁴⁰。しかし当の住民の中では自由なフランケンが今や見知らぬ領主に支配された、という意見が優勢であった。よく読まれている新聞の記事では「親国と支店国」というタイトルで匿名のヴェルツブルクの筆者が、フランケンの侯爵領の「バイエルン国」との関係は文字通り親子の関係だという誤解に対して警告を発した。なぜならば、支店機構というのは勝者側における大なり小なり、貴族制度の、利己主義の、専制政治の、略奪の、思い上がりの、恣意的な恩寵の、軍国主義の、自衛権の、抑えた表現であるからだ。編入された者にとって隷属と屈辱あるのみである。従って新しい国においてフランケン人に完全な平等が認められなくてはならない⁴¹。

バイエルンの支配で特に不愉快だったのは、街でも田舎でも容赦なく行われた世俗化の措置であった。私有化された数日後にはもう新たな修練士の採用が禁止された。それから托鉢修道会修道院が閉鎖され、バンベルク司教区だけでもドミニコ会修道院が2つ、フランシスコ会修道院6つ、カプチン会修道院5つ、カルメル会修道院1つが閉鎖された。バンベルクの英国の修道女だけは残されたが、それは女子教育に彼女達の代替がなかったからであった。最終的に所有許可状 (Besitzergreifungspatent) は富裕で文化的に抜きんでいるラングハイム、ミヒェルスベルクおよびバンツ修道院だけでなく、ヴェルツブルク司教区のすべての修道院や宗教財団にも及んだ⁴²。

廃止された教会の施設から没収した少なからぬ家屋および土地財産は国家目的に使用されるか競売に付された。司教区教会、兵舎または役所の建物として使い道が見つからなかった世俗の建物と特に教会の建物は壊されるか荒廃した。蛮行の典型的な例はミュンスターシュヴァルツァッハにあるバルタザール・ノイマン教会である⁴³。捨て値か材料の値段で貴重な文化財や工芸品、金銀の宗教儀式の道具、家財、絵画、塑像、図書が競売にかけられた⁴⁴。バンベルクにあったハインリヒ II 世の燕尾服や聖クーニグンデの冠、あるいは司教座聖堂参事会の貨幣コレクションのような、最も貴重な財宝はミュンヘンに送られた^{44a}。かつての聖堂図書室や宗教財団および修道院図書室の資料はヴェルツブルクとバンベルクの大学図書館に引き渡され、価値の高い手書き文書や揺籃期本はミュンヘンに送られた⁴⁵。

非常に憎まれたのは特別委員会の役人で、彼らは世俗化の作業を悪意のこもった狭量さと明らかに反教会の情熱をもって獲物探しを憚ることもなく行った。そのため間もなくバイエルンの代理人と政府を「ならず者」と呼ぶ誹謗文書やパンフレットが現れた⁴⁶。選帝侯の役人による教会内部の事柄や訴えに対する多大な啓蒙主義的介入は特に農民の強い反対に遭った。住民の宗教的感情と慣習を考慮しないで宗教生活が削減され、規制された。たとえば、祝日の日数が劇的に減らされ、行列や巡礼が禁止され⁴⁷、公道に面した礼拝堂や責め苦の柱は取り壊され、休息用ベンチを作る材料に充てられた⁴⁸。

啓蒙的なヴェルツブルク大学自身も - バンベルク大学は閉鎖された - 国家の干渉を止められ

なかった。管財人と新しい定款によって大学の自治が制限された。神学部は平等な「宗教に関する国民教師の育成に必要な知識の部」に変身させられた⁴⁹。

1806年2月1日バイエルン軍が引き揚げたときにヴュルツブルク市民の歓喜が止まることを知らなかったのはよく理解できる。数日後、新しい領主フェルディナント・フォン・トスカナが入城した。とはいっても彼は通常行われる礼砲で歓迎されなかった。というのはバイエルンが城塞の大砲をバンベルクに持って行ってしまったからであった。市民は興奮して集まった。彼らはふたたび首都であり、居城都市の市民となった。バイエルン統治時代は自分の土地にふくれっ面をして引き揚げていた貴族達もまた大公が華麗な宮廷を構える街の邸に戻った。貴族や官吏は新しい制服を身に着け、そのうえ弁髪をふたたび結わなければならなかった⁵⁰。大衆にとって嬉しいことにはバイエルン統治下で禁止されていた巡礼や行列がふたたび許可され、ミュンナーシュタットのアウグスティノ修道会はギムナジウムを新設できた。

両方の辺境伯領アンスバッハとバイロイトおよびフランケン⁵¹の帝国領、とりわけニュルンベルク、がバイエルンに移行したことは、増大する反フランスの雰囲気⁵²の役割が大きくなっていたとは言え、決して住民に歓迎されたわけではなかった。またこのツォレルン家の侯爵領がプロイセンの手に落ちたことは住民の賛成がまったく得られなかった。ごく少数の者が

「ブランデンブルクのフランケン」と呼ぶことを誇らしく思っただけであった⁵¹。しかし特にバーゼル和約以後の平和な時期ではハルデンプルクの政策の成功は顕著な雰囲気の変化をもたらした。特に貴族による当初の拒絶と抵抗はプロイセンの君主への依存へと軟化した。

1805/1806年の冬に国の交換が行われてバイエルンに移行するという噂が流れたとき、不安になったアンスバッハの住民による多数の請願文書がベルリンに届いた。アンスバッハ市の住民は「血の出る思いで」プロイセン王に「千年来アンスバッハおよびバイロイトの誠実な住民とブランデンブルクの君主とを結び付けていた聖なるまた名誉ある絆」が暴力的に解消されないようにして欲しいと請願した。どうしても必要な場合には自分達の生命財産をプロイセンへの帰属のために犠牲にする用意がある、と書いた。アンスバッハの実例ではマインベルンハイムの住民とクライスハイム議会の臣民4000人が参加した⁵²。

しかし多数の人は圧迫していたフランスの占領から解放されることを喜んだ。その他に新しい君主を彼がアンスバッハに亡命していたときに知っており、気に入っていたので、期待なしに待ち受けていた訳でもなかった。

その間にフランスの占領下のバイロイトでは反フランスの空気が強くなり、その上に時折あちこちで騒ぎが起こるようになった。どのくらい拒絶の度が大きかったかを、義勇兵フォン・ノスティツ伯爵が1809年の春にオーストリアの叛乱のあと設立した「フランケン軍団」が、彼の募兵が期待したナポレオンに対する民衆蜂起につながらなかったにせよ、示している。しかし「フランケン軍団」とボヘミア隊はバイロイトでもバンベルクでも大きな歓呼で迎えられた。それどころかニュルンベルクではバイエルン連隊とフランスとの同盟者に対して叛乱が起きた。「皇帝軍」が進軍してくるといって噂が広がったので、総督フォン・テュアハイム伯爵は市を防衛するために6月25日市民達を招集した。彼がニュルンベルク住民は「ならず者の群れ、靴屋、仕立屋、機織り屋が集まったような敵を恐れることはない、と言ったとき、その場にいた手工業者は職業の名誉をいたく傷つけられた。翌日オーストリアの槍騎兵が入城したとき、暴徒がバイエルンの宿舍の事務所に殺到し、興奮した群衆がテュアハイム伯爵に「糞や石を投げつけ、足蹴にした」。冷静な市民衛兵が割って入ったのでそれより酷いことは避けられた。テュアハイムと警視総監ヴルムはバイロイトに引っ張って行かれたが、やがて前進してきたフランス軍によって解放された⁵⁴。

やがて1810年6月30日侯爵領バイロイトが名誉あるフランスの地方総監トゥーロンからバイエルン国王に引き渡されたとき、人々は「良き父マックス」と共に再びドイツの君主を持ち、エアランゲンの神学者アモンが祝祭の説教で述べたように、市民は再び「好きだったプロイセン王から見放されたあと、誰に属しているか」を知った。美化された思い出の中で、人々はハルデンプルク下の時代が「黄金期」と思った。また当然のことながら、バイエルンの寛容勅令にもかかわらず⁵⁴、宗派的な動機が軽視できない役割を演じた。プロイセンはフランケンの新教の保護国として重要であった⁵⁸。

とりわけプロイセンの時代からの官吏は反バイエルンの雰囲気作りをしていると疑われていた。この空気はナポレオンがロシア遠征が失敗したあと、多かれ少なかれあからさまなドイ

ツ国粹的な、反フランス的な雰囲気に変化し、まだナポレオンと組んでいるバイエルンをも激しく非難した。帝国の伝統がフランケンで生き活きと残っており、ドイツの独立運動に通じていた⁵⁹。その際の空気はもともと反バイエルンではなく、反フランスであった。特に新教地区におけるフランケン住民の信頼できない態度について苦情がミュンヘンに多く寄せられた。それゆえニュルンベルクの郵政局長アクステルムは、北部の地方においては人々はただ二つの心情しか持っていない、それはプロイセンかオーストリアである、と報告している⁶⁰。もしロシア人がフランケンに来たならば民衆叛乱を覚悟しなければならない。アンスバッハ-バイロイトの公務員にとって新たな転換の際に再びプロイセンの手に落ちることほど歓迎すべきことはないであろう。フランケンの地方ではいたるところ公然とした反フランスの空気があった。プロイセンの行動的な公使ジェフリーはミュンヘンからベルリンに宛てて次のように書いている。「フランケンを失うのではないかというバイエルンの心配は大変なものです。プロイセンの軍勢がそこに現れれば全地方で叛乱が起こると思っています。バイエルンでは徴兵はますます非常に難しくなっており、最近の大量動員のための政府による呼びかけはまったく見向きもされませんでした」⁶¹。プロイセンが再びアンスバッハ-バイロイトを占領するという噂が夏の間に強くなった。人々はブリュヒャーがフランケンに進軍することを希望あるいは期待した。徹底的な役人の入れ替えだけではフランケンの流れを抑えることができなかった。バイエルンの政治的交替とナポレオンに対する勝利への歓呼の声はますます大きくなった。

ウィーン会議において最終的に各国の運命が決定されたとき、プロテスタントの領地アンスバッハ、バイロイトおよびニュルンベルクがまたバイエルンから切り離され、プロイセンに渡されるという噂が立った。しかしこの噂はプロイセンの新聞記者が意図的に流したものであり、効果がなかったし、またフランケンでも支持が得られなかった⁶²。

現在の領土と主権が確保され、「バイエルン帝国」が表向き完了したあと、「バイエルンの国民意識」を持つ新しい国土に生命を吹き込み、また近代バイエルンの建設の際にフランケンの得心した積極的な協力を獲得することが重要であった。最も容易にこれを達成したのは、少数の例外はあるものの、バイエルンの国家公務員に鞍替えし、国に忠実に仕えた官吏と、都市部、特に以前の帝国都市における富裕な、教養のある市民階級であった。これらの都市では少数の富裕層による寡頭政治が特定層だけの支配権独占を維持しようとし、都市の統治から市民層を締め出していたが、このことが旧帝国の終わり頃には都市内部での騒動と叛乱すら招いていた⁶³。「誰がここの支配者になろうと結局同じことだ、と誰もが言っている」と1802年バイエルンの偵察兵リポピエール少佐が帝国都市シュヴァインフルトから報告している。続けて「自分は初めて恐れられている政府がプロイセン政府だということを知りました」と報告している。そのとき彼は特にその都市の時代錯誤的な社会構造と市参事会員の宗教的不寛容に驚いたのであった⁶⁴。

1818年バイエルンの自治体法が発効して⁶⁵かつての帝国都市に評議会が作られた。そこでは初めてしかも圧倒的に富裕な市民が代表者となった。ローテンブルクでは最初の自治体選挙が行われ、市参事会と自治体全権委任者では上級の手工業者が圧倒的多数を占めた。これに対しニュルンベルクの自治体評議会では富裕な商人が多数を占めた⁶⁶。

ニュルンベルクの経済力のある市民階級が、権限を奪われた富裕な貴族よりも多数であり⁶⁷、特に経済的な発展が約束されるという大きな期待をバイエルン政府に抱かせた。バイエルンに所属した数日後には市の名士達、高級官僚、それに特に裕福な証人が属している団体「ハルモニー」が豪華な祝宴で「ニュルンベルクと王国バイエルンの統合」を祝った⁶⁸。団体としてさらに強い結びつきが新しい国家公務員および軍隊とニュルンベルクの上層市民との間で団体「博物館」において形成された⁶⁹。その設立会員の中には警視総監ヴルムとならんでニュルンベルクでひどい扱いを受けた総督テュアハイム伯爵もいた。大商人メルケル⁷⁰とベステルマイヤーその他の富裕で教養有る市民階級に属する人達と一緒に、彼らは「教養ある等族が共有する協調場所」として協会を作った。この協会にやがて多くの富裕層、バイエルンの将校や上級公務員、さらにニュルンベルクの啓蒙された市民階級が加わり、その中にはギムナジウム校長ヘーゲルもいた。1819年に設立された、主に農業と社会組織を対象としたニュルンベルクの「産業・文化協会」は最初から所轄の国家官僚と有力市民の私的創設者と密接に協力した。地主と金持ちの他に協会はやがてニュルンベルクの商人や管区役所

の官僚の代表者を会員に加え、さらに名誉会員には大臣のフォン・ヴレーデ侯爵を迎えた⁷¹。

フランケンにおける新しいバイエルンの国家意識はどこよりも皇太子ルートヴィヒのグループで育った。彼にはトスカナ大公領から移行した際にヴェルツブルクとアシャッフエンブルク城が住居として指定されており、それはなによりも反バイエルンの市民を味方につけ、和解させることが狙いであったが、彼はそれにうまく成功した⁷²。ルートヴィヒの宮廷には、ドイツの連邦規約により期待されていた等族の特権の復活が得られなかったフランケンの上級および下級貴族が集まった。ルートヴィヒのところで協会復活の代表者たちは彼らの苦情を政教条約、特に新教徒のための「新しい宗教勅令」に持ち込むことができるという、支援が得られた。しかし「ドイツの」ルートヴィヒの周りにはなによりも解放闘争に参加した教授達や学生達よりも先に、貴族および早期自由主義的市民階級の国民的および立憲主義的運動の信奉者が集まった。これによってまだフランケンに生き残っていた帝国愛国主義の残留効果は皇太子ルートヴィヒと彼のヴェルツブルク市民の友好グループによってバイエルンの立憲運動に持ち込まれた⁷³。

1818年5月26日の憲法が遂に大いなる希望を見出したフランケンで熱心な信奉者やジャーナリストを獲得したのはいわれのないことではない。そういうことでエアランゲンの教授ハルルがこの憲法を、バイエルンの歴史に新しい時代を築く解放状と言ってベタ褒めした⁷⁴。批判的なアンセルム・フォン・フォイエルバッハ自身もこの憲法がようやくモンジュラが主導した国家統一を完成したことを確信した。「この憲法によって我々の国王はアンスバッハ、バイロイト、ヴェルツブルク、バンベルクおよびその他のフランケンの国をようやく征服した」。ヴェルツブルクにいるゾイフェルトにおとって、「もしバイエルンがフランケン、シュヴァーベンおよびライン諸国のように、同じ権利、同じ自由を喜べることを誇りに思い喜びを感じるならば」、この憲法は旧バイエルンと新バイエルンの間の最後の差別を取り除いた⁷⁵。上級貴族であり自由主義者で皇太子の友であるエアヴァイン・フォン・シェーンボルンはそのどころかこの憲法を「マグナカルタ ... バイエルンの歴史およびその君主が示すことのできる最大のまた最も効果のある行為」として祝福した⁷⁶。憲法を祝福するためにシェーンボルン伯爵は著名なレオ・フォン・クレンツェに、ガイバッハ近くのゾネンヒューゲルに「憲法記念柱」を建てることを委託した。その定礎式は憲法公布の3周年記念日に皇太子ルートヴィヒと下マイン管区の名士達が出席して行われた。二人のロマンティックな友はその際に「生死を懸けた憲法に対する結束」を新たにした⁷⁷。

しかしフランケンにまだこの憲法に基本的な承認を与えることを拒否し、まだ改善することができるとする声があった⁷⁸。そういうことでバイエルンの議会におけるフランケンの議員は再興の間に立憲主義者と自由主義者の主要な代表者となった。それは穏健なルートハルトとヘッカーと特に急進的な代弁者ベールとホルンタールであった。フランツ・ルートヴィヒ・フォン・ホルンタールはバンベルクの弁護士からニュルンベルクの警視総監になり、市長になる前にまたバンベルクに戻った。彼はその傍ら自由主義の文筆家としてフランケンの外にも名が知られていた⁷⁹。ヴィルヘルム・ヨーゼフ・ベール⁸⁰はゲロルツホーフエン近くのズルツハイムで生まれ、ヴェルツブルクとゲッティンゲンで学び、1799年からヴェルツブルク大学で憲法の教授をしていた。自分の自由主義的見解に基づいてベールはやがて皇太子ルートヴィヒとそのグループとに個人的な関係を結んだ。ベールのバイエルン憲法に対する態度は、彼の理想的な国家と完全に一致はしなかったが、肯定的であった。なによりも二院制によって人民が軽く考えられており、またこの憲法が人民と国王との間で合意されていないことを非難していた。

何人かの態度のはっきりしない自由主義者の影響が強くなった1819年の議会で、ベールは指導的な役割を演じた⁸¹。フランケンの自由主義者の主な要求は憲法上の軍隊の宣誓であった。ベールはそのどころか人民軍の導入、司法と行政の分離、二院に対する法優先権、報道の自由の導入、裁判の口頭弁論と公開制、職業の自由の導入を要求した。これは三月革命以前における南ドイツの自由主義者のいつもの要求であって、憲法とその可能性を完全に満たすことを主張していた。ベールはカールスバート決議以来その講義を警察から監視されていたが、1821年ヴェルツブルクの人民により市長に選ばれた。大学の代表に留まるため、彼は内務省に教職を保持できるよう働きかけたが根拠を示さずに拒否された。次の議会で下フ

ランケン都市の議員として移動しようとしたとき、そのための休暇を拒否された⁸²。ホルンタールももう入らなかったので、フランケンの自由主義の野党は両方の弁士を奪われた。当然のことながらこの法的に非常に疑わしいフランケンの省の官僚の措置は注目と憤激を招いた。一般の意見と特にフランケンの自由主義者はすべての望みを尊敬されている皇太子ルートヴィヒの即位に託した。つまり彼にフランケンにおけるバイエルン政治の根本的な変革を期待したのである。

参考文献

- 1 Siehe hierzu R. Endres, Die preußische Ära (Spindler III/1) 406-415 (weitere Literatur); H. H. Hofmann, Die preußische Ära in Franken (Jb. f. Mittelfranken 79) 1960/61, 224-244; künftig R. Endres, Die preußische Ära in Franken (1791-1806) (Kar. d. Preußen-Ausst. in Berlin) 1981.
- 2 R. Endres, Die Erbabreden zwischen Preußen und den fränkischen Markgrafen im 18. Jh. f. fränk. Landesforsch. [JffL] 25)1965, 43-87.
- 3 F.Hatung, Hardenberg und die preußische Verwaltung in Ansbach-Bayreuth 1792-1797, 1904, 283.
4. W. Real, Der Friede von Basel (Basler Zschr. f. Gesch. u. Altertumskunde 50, 51) 1951/52, 27ff, 115ff.; H. Haussherr, Hardenberg und der Friede von Basel (HZ 184) 1957, 292-335.
- 5 H. Hofmann, Adelige Herrschaft und souveräner Staat. Studien über Staat und Gesellschaft in Franken und Bayern im 18. und 19. Jh. (Stud.z.bayer.Verfassungs- u. Sozialgesch. 2) 1962, 167ff. Hardenberg gewinnt rund 113000 neue Untertanen und ca. 200000 fl. an jährlichen Einnahmen. Siehe Hardenberg, Generalbericht (Hohenzollerische Forsch., hg.v.Chr.Mazer, 1) 31f.
- 6 Ebd. § 18, 36f.
- 7 Subjektionsvertrag vom 2. Sept. 1796, abgedr. in: Hänlein-Kretschmann, Staatsarchiv der Königl. Preuß. Fürstenthümer in Franken II, 1797, 483-491; M. v. Oesfeld, Geschichte der Okkupation der Freien Deutschen Reichsstadt Nürnberg und deren Vorstädte durch Preußen im Jahre 1796, 1876.
- 8 K. Süßheim, Preußens Politik in Ansbach-Bayreuth 1791-1806, 315.
- 9 Nürnberg - Geschichte einer europäischen Stadt, hg. v. G. Pfeiffer, 1791, 310ff.
- 10 F. Tarrasch, Der Übergang des Fürstentums Ansbach an Bayern, 1912, 7ff.
- 11 Süßheim (wie Anm. 8) 323f.
- 12 H. Haussherr, Hardenberg. Eine politische Biographie I. Aus dem Nachlaß hg. v. K. F. Born, 1963, 222ff.
- 13 Süßheim (wie Anm. 8) 335ff.; grundlegend zum folgenden: Bayer. Geschichtsatlas, Karte 35u. HAB II, Karte 3.
- 13a Tarrasch (wie Anm. 10) 28f.
- 14 E. Bauernfeind, Die Säkularisationsperiode im Hochstift Eichstätt, 1927, 47ff.; HAB Eichstätt (G. Hirschmann). 159ff.
- 15 H. H. Dunkhase, Das Fürstentum Krautheim, 1968, passim.
- 16 HAB Aschaffenburg (G. Christ), 169ff.
- 16a Besitzergreifungspatent für Würzburg und Bamberg, abgedr. in: Regierungsblatt für die Churbayerlichen Fürstenthümer in Franken (=RBI. Franken) 1803, 3f.
- 17 Quellen zum Verfassungsorganismus des Heiligen Römischen Reiches Deutscher Nation 1495-1815, hg. v. H. H. Hofmann (Ausgewählte Quellen z. Dt. Gesch. der Neuzeit 13) 1976, 329ff.
- 18 RBI. Franken (wie anm. 16a) 1804, 9-11.
- 19 Ebd. 1803, 261-263; H. H. Hofmann (wie Anm. 5) 525ff.
- 20 Der Letzte Kampf der Reichsritterschaft um ihre Selbständigkeit 1790-1815, 1910 bes. 119ff.
- 21 Quellen zum Verfassungsorganismus (wie Anm. 17) 368-374.
- 22 R. Endres (Spindler III/1) 257ff.; A. Chroust, Das großherzogtum Würzburg (Neujahresbl. 8) 1913; Ders., Das Würzburger Land vor Hundert Jahren (Veröffentl. d. Ges. f. fränk. geschichte 1914; ders., Eine österreich. Sekundogenitur in Franken (ZBLG 2) 1929, 395-444.
- 23 Text bei L. von Ranke, Die Denkwürdigkeiten des Fürsten Hardenberg II, 1878, 489.
- 24 F. Tarrasch, Der Übergang des Fürstentums Ansbach, 1912, 91ff.
- 25 Deutscher Text der Rheinbundakte in RBI. (wie Anm. a8a) Bayern 1807, 47ff.

- 25a Bayern mußte eine Schuldenlast der Reichsstadt von fast 12 Mill. Gulden übernehmen. W. Schwemmer, Die Schulden der Reichsstadt Nürnberg und ihre Übernahme durch den Bayerischen Staat, 1967, 12f.
- 26 R. Endres, Das Ende des Fränkischen Reichskreises (Spindler III/1) 245ff.; B. Sicken, Der Fränkische Reichskreis . Seine Ämter und Einrichtungen im 18. Jh. (Veröff. d. Ges. f. fränk. Gesch., Fotodruckreihe 1) 1970, 107ff.
- 27 E. Riedenauer, Reichsverfassung und Revolution. Zur Persönlichkeit und Politik des fränk. Kreisgesandten Friedrich Adolph von Zwanziger (ZBLG 31) 1968, 124-196.
- 28 H. J. Bergig, Das kaiserliche Hochstift Bamberg und das Hl. Röm. Reich vom Westfälischen Frieden bis zur Säkularisation, 1976, 425ff.
- 29 E. Deuerling, Das Fürstentum Bayreuth unter französischer Herrschaft und sein Übergang an Bayern 1806-1810, 1932; H. Liermann, Das Fürstentum Bayreuth in Jahre 1810 (Arch. f. Gesch. u. Altertumsk. in Oberfranken [=AO] 40) 1960, 206ff.
- 30 R. Endres (Spindler III/1) 257ff.; HAB II 64ff.
- 31 E. R. Huber, Deutsche Verfassungsgeschichte seit 1789, I, 1967², 317ff., K. Bosl, Die historische Staatlichkeit der bayer. Lande (ZBLG 25) 1962, 1-19; E. Weis (Spindler IV) § 3.
- 32 Vgl. die einschlägigen Bände des HAB; Hofmann (wie Anm. 5) 274ff.; K. Müssel, Die Grundlegung Oberfrankens im Mainkreis von 1810 (AO 40 [wie Anm. 30] 1960, 219-257.
- 33 RBI. (wie Anm. 16a) Bayern 1808, 985ff.
- 34 Ebd. 1481.
- 35 Hofmann (wie Anm. 5) 305ff.
- 36 RBI. (wie Anm. 16a) Bayern 1817, 113; Bayer. Geschichtsatlas, Karte 36.
- 37 HAB Eichstätt, 164ff.
- 38 Grundlegend hierzu M. Spindler, Der neue bayerische Staat des 19. Jhs. (AO 40 [wie Anm. 30] 1960, 258-273.
- 39 Im Bamberg wurden sogar die bayerischen Besitzergreifungspatente abgerissen, so daß sie militärisch bewacht werden mußten. W. G. Neukam, Der Übergang des Hochstifts Bamberg an die Krone Bayern 1802/03 (Bayern, Staat u. Kirche, Land u. Reich. W. Winkler z. Gedächtnis, hg. v. d. staatl. Archiven Bayerns) 1961, 249ff.; L. Günther, Der Übergang des Fürstbistums Würzburg an Bayern, 1910, 27ff.
- 40 Vgl. die böseiligen Äußerungen bei (v. Tannenberg), Beobachtungen ohne Brille über die Säkularisation der geistlichen Bistümer und Besitzungen, besonders Würzburg und Bamberg. Von einem Bewohner dieser Länder, 1803; M. Rinner, Regierung, Wirtschaft und Finanzen des Kaiserlichen Hochstifts Bamberg im Urteil der bayerischen Verwaltung (Jb. f. fränk. Landesforsch. 26) 1966, 307-350.
- 41 M. Hofmann, Staat und Bürger im bayerischen Unterfranken (Mainfränk. Heimatkunde) 1965, 56ff., Zitate 62.
- 42 J. Kist, Fürst- und Erzbistum Bamberg, 1962³, 130ff., M. Pfeiffer, Beiträge zur Geschichte der Säkularisation in Bamberg, 1907; Bauernfeind (wie Anm. 14); Günther (wie Anm. 39); A. Wendhorst, Das Bistum Würzburg 1803-1957, 1965, Kap: "Quae tristis desolatio". Zur Diskussion in der Öffentlichkeit siehe P. Wende, Die geistlichen Staaten und ihre Auflösung im Urteil der zeitgenössischen Publizistik, 1966; noch immer wichtig A. M. Scheglmann, Die Säkularisation im rechtsheimischen Bayern, 3 Bde., 1903/06.
- 43 A. Wendhorst, Der Untergang der alten Abteikirche Münsterschwarzach 1803-1841 (Mainfränk. Hefte 17) 1953.
- 44 Die Versteigerung der erbeuteten Diamanten in Würzburg erbrachte 48130 fl., Monstranten und Kelche brachten nochmals 17593 fl. Aus dem Verkauf der Bücher erzielte Thürheim einen Gewinn von 603120fl., den er nach München überwies. Günther (wie Anm. 39) 125ff.
- 44a Schengelmann (wie Anm. 42) 80.
- 45 Allein im Bereich des Bistums Bamberg sollen aus Kloster- und Stiftsbibliotheken mindestens 1100 Handschriften an andere Bibliotheken abgegeben worden sein, ganz abgesehen von den schweren, kaum abzuschätzenden Verlusten, die sie durch Verschleuderung, Diebstahl, Makulierung der Stifts- und Klosterbibliotheken im Gebiet des Erzbistums Bamberg, Diss. Masch. Erlangen 1952.

- 46 Günther (wie Anm. 39) 133ff.
- 47 C. Köhl, Wie wir bayrisch wurden (Würzburger Journal) 1914, 5; L. Günther, Würzburger Chronik, 1925, paasim.
- 48 Neuburger Regierungsblatt 1804, 17 (betraf Eichstätt).
- 49 RBI. (wie Anm. 16a) Franken 1803, 289-298.
- 50 A. Chroust (wie Anm. 22), Daß Großherzog Ferdinand keineswegs nur "zopfig" dachte, zeigt allein die aufhebung des Judenleibzolls, den die bayerische Regierung beibehalten hatte, da dieser "der Würde des Menschen widerstrebe", Köhl (wie Anm. 47) 11.
- 51 J. A. P. Weltrich, Erinnerungen für die Einwohner des Fürstentums Beyreuth aus den Preußischen Regierungsjahren 1792-1807, 1808, 2f.
- 52 U. Thürauf, Die öffentliche Meinung im Fürstentum Ansbach-Bayreuth zur Zeit der französischen Revolution und der Freiheitskriege, 1918, 91ff.
- 53 A. Ernstberger, Die deutschen Freikorps 1809 in Böhmen, 1942, 299-345.
- 54 Siehe die Schilderung von K. H. Ritter von Lang, Memoiren II, 1842, 122; G. Hirschmann, die Ära Wurm in Nürnberg 1806-1818 (Mitt. d. Vereins f. Gesch. d. Stadt Nürnberg 48) 1958,[] 285f.
- 55 E. Martius, Erinnerungen aus meinem 90 jährigen Leben, 1848, 239.
- 56 Erlangens Huldigungen bei der Übergabe des Fürstentums Bayreuth an die Krone Baiern und am Maximilianstage 1810. Zwei Predigten, in der Hauptkirche zu Erlangen gehalten von Dr. Ch. Fr. Ammon, Erlangen 1810.
- 57 RBI. (wie Anm. 16a) Franken 1803, 13f.; G. Pfeiffer, Die Umwandlung Bayerns in einen patritätischen Staat (Bayern, Staat u. Kirche Land u. Reich [wie Anm. 39] 35-109.
- 58 G. A. Vischer, Die Ev.-Luth. Kirche in Bayern von 1800 bis 1820, 1951; Thürauf (wie Anm. 52) 113ff.
- 59 L. Zimmermann, Die Einheits- und Freiheitsbewegung und die Revoltion von 1848 in Franken (Veröff. d. Ges. f. fränk. Gesch.) 1951, 20f; L. Rieger, Die Stimmung und Hoffnung der fränkischen Provinzen im Jahre 1813, Diss. Masch. München 1921.
- 60 M. Doeberl, Bayern und die deutsche Erhebung wider Napoleon I., 1907, Beilage 1, 410f.
- 61 Ebd. 362.
- 62 Thürauf (wie Anm. 52) 143f.
- 63 So kam es etwa in Nürnberg wie in Rothenburg im letzten Jahrzehnt des 18. Jhs. mehrfach zu Revolten. Vgl. A. Schnitzlein, Der letzte Kampf zwischen Rat und Bürgerschaft (Linde 1924); A. Ernstberger, Nürnberg im Widerschein der Französischen Revolution 1789-1796 (Franken-Böhmen-Europa. Gesammelte Aufsätze) 1959,457-526; H. Scheel, Süddeutsche Jakobiner. Klassenkämpfe und republikanische Bestrebungen im deutschen Süden Ende des 18. Jhs., 1961 (marxistische Interpretation).
- 64 H. H. Hofmann, ...sollen bayerisch werden, 1954, 3. So war noch im Jahr 1802 einem Katholiken der längere Aufenthalt in der protestantischen Reichsstadt verboten.
- 65 Gesetzblatt für das Königreich Bayern 1818, 59.
- 66 Nürnberg (wie Anm. 9) 362f.
- 67 G. Hirschmann, Das Nürnberger Patriziat im Königreich Bayern 1806-1918 (Nürnberger Forschungen 16) 1971, 33ff.
- 68 W. Mezer, Das Vereinswesen der Stadt Nürnberg im 19. Jh. (Nürnberger Werstücke 3) 1970, 53f.
- 69 E. Reicke, 125 Jahre Gesellschaft Museum Nürnberg, 935; vfl. auch R. Endres, Vereinskultur (Nürunbergs Industriekultur) 1980.
- 70 Seine Frau hatte beim Einmarsch der bayerischen Truppen ihren Kindern noch weined erklärt: "Ihr armen Kinder, jetzt seid ihr Fürstenknechte". G. Hirschmann, Fortleben reichsstädtischen Bewußtseins in Franken nach 1806? (Jb. f. fränk. Landesforsch. 34/35) 1974/75, 1043f.
- 71 K. Kleiner, Der Industrie- und Kulturverein, 1929.
- 72 Vgl. Unterfranken zur Zeit König Ludwigs I. - Ausstellungskatalog. 1964; unterfranken im 19. Jh. (Mainfränk. Heimatkunde 13) 1965 mit zahlreichen einschlägigen Beiträgen.
- 73 Zimmermann (wie Anm. 59) 87ff.
- 74 J. P. Harl, Ueber einige der wichtigsten Vortheile und Vorzüge der neuen Verfassungs-Urkunde des königreichs Baiern, Erlangen 1818. Gewidmet war die Broschüre "Dem Genius von Baiern".
- 75 Huber , Verfassungsgeschichte 320; M. Doeberl, Ein Jahrhundert bayerischen Verfassungslebens,

1918, 58f.

76 Hofmann (wie Anm. 41) 68f.

77 M. H. von freeden, König Ludwig I. und Unterfranken (Mainfränk. Heimatkunde 13) 1965, 91f.

78 W. J. Behr, Staatswissenschaftliche Betrachtungen über die Entstehung und Hauptmomene der neuen Verfassungsurkunde des bairischen Staates, Würzburg 1818; Vgl. auch F. L. von Hornthal, Zur Kritik der Verfassunsurkunde des Königreichs Baiern, Bamberg 1818.

79 F. L. von Hornthal, in: Lebensläufe aus Franken (Ges. f. fränk. Gesch. 3) 1927, 245.

80 M. Domarus, Bürgermeister Behr. Ein Kämpfer für den Rechtsstaat, 1971; E. Üfeiffer, Wilhelm Joseph. Behr, 1936.

81 Zimmermann (wie Anm. 59) 104ff.

82 Domrus (wie Anm. 80) 102ff.; Zimmermann (wie Anm. 59) 110ff.

-.